

# 「新聞で教室を社会とつなげよう！」

神戸山手女子中学校高等学校

校長 平井 敬員

教諭 近藤 隆郎

## 1. はじめに

現行の学習指導要領で、新聞活用が初めて明確に位置付けられた。また、先般公示された新学習指導要領においても、校種や学年を問わず広く教育活動のなかで新聞を活用することが謳われている。とりわけ総則において情報活用能力や言語能力があらゆる教科を通じて必要な力であると位置付けられたことから、これまでNIEを通して取り組まれてきた「主体的・対話的で深い学び」をより一層推し進めることの重要性をあらためて認識させられることとなった。

では、わが校の実践状況はどうであろうか。そう自問してみたところで、実践はおろか認識さえ十分になされていないことに気付かされた。情けないかぎりである。しかし嘆いていてもはじまらない。先ず臆より始めよ、と言うではないか。

お恥ずかしい話ながら、これがNIE実践指定校に手を挙げた正直な理由である。

## 2. 実践テーマ

「新聞で教室を社会とつなげよう！」をテーマに、全校で、しかしながら気負わずに、様々な場面で紙面を活用させていただく機会を増やしていくことを目指した。

情報や知識の習得はもとより、「読む力」、「考える力」、「話し合う力」、「判断する力」、「表現する力」などを養うことに新聞が如何に力を発揮することが出来るのかを大人も子どもも実感できれば、実践指定が終了し、新指導要領に移行する頃に成果が表れるものと期待してのことだ。

## 3. 実践の概要

### ①実践の準備

前項で「告白」した通りの状況であったので、校内で「NIEに取り組む！」と宣言した際に、「それは一体なんぞや？」という反応が返ってきたのは言うまでもないことであった。ならば、百聞は一見に如かずというわけで、スタート直前の2月に、地元兵庫と大阪で行われた実践発表会へ各教科の有志を募って参加することからはじめた。それぞれ、教員主体の発表と生徒主体の発表であったことから、取り組ませる側と取り組む側双方の声を聴けて非常に有意義であった。

なお、実践発表会へはその後も断続的に参加しており、6月の兵庫、8月の全国、2月の兵庫で各校の意欲的な取り組みから大いに刺激を受けている。

## ②実践の開始

新聞各紙の年間購読計画を定めるにあたり、一般紙のほかに英字紙と経済紙を入れることで英語科や社会科（公民科）の専門的な利用に供することを旨とした。また、地元紙には自らが報じられる機会に活用されることを期待することとした。

購読紙	購読月
朝日新聞	5・6・7・8月
産経新聞	5・6・7・8月
The Japan News	5・7・9・11月
毎日新聞	9・10・11・12月
日本経済新聞	9・10・11・12月
神戸新聞	12・1・2・3月

## ③閲覧コーナーの設置

新聞立てを購入し、食堂内に閲覧コーナーを設けた。

ところで、日数が経過した新聞は、当初は古紙回収にまわしていたが、新聞を購読していない家庭があることから、生徒の持ち帰りを可としてリサイクルの前にリユースをはかることとした。



（食堂内の新聞閲覧コーナー）

## ④授業内の取り組み

社会科を中心に、各教員が記事を授業で取り上げるなどしたほか、夏休みの課題の自由研究、後述のコンクールへの応募、定期考査への紙面からの出題などで新聞活用を進めた。

また、校内の研究授業の際に、高校の日本史で、戦前の新聞を用いた授業実践を行ったのはこれまでにない挑戦であった。

一方、高校の現代社会や時事研究では、これまで同様『ニュース検定公式テキスト&問題集』（毎日新聞出版）を用いて新聞をより深く読み込む授業実践を続けた。

## ⑤コンクールへの応募

下記のコンクールへの応募を高校の現代社会の選択課題の一つとした。

「いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）

「ひょうご新聞感想文コンクール」（神戸新聞社主催）

⑥紙面への投稿・掲載

下記の紙面への投稿に中学の国語や高校の現代社会演習で取り組み、たびたび掲載していただいた。また、掲載紙面は投稿者の在籍する学年の各教室や校内の掲示板に掲出するなどしたほか、授業で教材として利用させていただいた。

「練習手帳」（読売中高生新聞）

「声」（朝日新聞）

「発言」（神戸新聞）他



● 中島深月さん(兵庫・神戸山手女子高3年)

**練習手帳**

若くて実力の備わった人物が姿を現すようになる、世の中が騒ぎ始める、厄介なと思う者がいる、ことに大人は気付いているだろうか、親や身近な人に「こんな若い子が頑張っているんだから、あなたも頑張らなさい」と言われてプレッシャーを感じる人がいることを。藤井四段も若くして実力を発揮し、私たちが比較されてしまう対象の一人だ。勿論のことだが彼には何の罪もない◆藤井四段は、29連勝という輝かしい成績と共に攻撃的な将棋の戦法とは裏腹な謙虚な態度で注目を集めている◆彼の強さの秘訣は、5歳から始めた将棋とコンピュータソフトの存在にある。ソフトの利用は大人なら使うのをためらうものだが、この気があるのだが、それも彼の苦み故か。近頃、卓球の伊藤選手、平野選手、将棋の藤井四段のように若者が各所で活躍する姿をよく見かける◆彼らが活躍すると負けじと追いかけてくる選手や、彼らに憧れを抱き選手となる人材がまた現れ、相乗効果が生じる。彼らのような存在が生まれる環境が整い、またそれに憧れて努力する若者が増えることを期待したい。

独自の視点 生かしたい

誰の模倣でもない、新鮮な視点に感心しました。天才児が世間で騒がれるとき、同世代の人は厄介なプレッシャーを感じるものなのです。言われて、初めて気づきました。一つ残念なのは、せっかく中島さんならではの感想から書き始めたのに、その視点がいつのまにか立ち消えになってしまったことです。最終段落では、藤井四段など各段の若き実力者が憧れて、地道な努力をする若者が増えることに期待を表明しています。結論はそれでいいとして、では、「藤井騒動」で感じたプレッシャーをどう乗り越えていくのか。そこに触れてあれば、文章にもっと深みが出たでしょう。

● 門原穂乃花さん(兵庫・神戸山手女子高3年)

**練習手帳**

5月16日、秋篠宮ご夫妻の長女眞子さまが、大学生時代の同級生の小室重さんと婚約されることになった。実にめでたいことである◆しかし、相手は「湘南江の島海王子」。偏見かもしれないが、かなりチャラいのではないかと、そもそも皇室の方は恋愛結婚そのものが許されないのではないかと。こんな婚約なんてありえない。「眞子さま、お相手はその方で本当によろしいのですか？」◆気が付けば膨らんだ妄想のなかで、かなり失礼なことを思っていた。そう。チャラいのは私の方

じゃないか◆果たして、私の妄想は大きく外れていた。新聞記事やテレビによる、一誠実で努力家。英語力が抜群に良くて礼儀正しいと……。誠に申し訳ないんですけど◆私もだが、人を見た目で判断する人がいる。派手な格好をしているからチャラいとか、落ちついた格好をしているからおとなしい人なのだろう、とか。ひどくなると見た目で、まるでその人が悪人であるかのように判断する人もいる。私は見た目で判断する人を悪だと思わないが、その人の内面を見る、ことが判断する上で最も重要であると思った。

読む人を笑顔にするユーモア

昔から、「文ば人なり」と言います。文章には書いた人の性格や人柄がにじみ出る、という意味です。門原さんにお会いしたことはありませんが、ユーモアのセンスに感服した方と拝察しました。一海王子はかなりチャラいのではないかと。眞子さま、お相手はその方で本当によろしいのですか。おいおい、いったい何を言っているんだ。こちらがあわてたところで、以上は勝手な「妄想」であり、事実に基づかない「偏見」だと痛切かきをする。第4段落の「偏見」だと痛切かきいませんでした。には、してやられただけで文章として合格です。

(投稿掲載紙面『読売中高生新聞～練習手帳～』

左：2017.8.4号、右：2017.7.7号)

⑦取材を受けた紙面の授業等での活用

高校の時事研究で取り組んでいる「テーブル・フォー・ツー」、同じくキャリア教育で取り組んでいる「神戸メロンパンご当地フード化計画」は、いずれも各種メディアの取材を受けており、新聞紙面にもたびたび掲載していただいていることから、記事掲載紙面を授業で活用することで取り組みそのものの方向性を確かめたり、発奮の材料にしたりしている。生徒にとってこれほど活きた紙面活用の方法はないと自負している。



(取材を受けた紙面を掲出した校内掲示版)

#### 4. 2年目に向けて

N I Eを地に足の着いた、息の長い取り組みにすること。そして学習指導要領が目指す新しい時代を生き抜く力を備えた生徒を育てることへとつなげること。――これが実践指定校の間に為すべき課題だと考えている。

ただし、現実がそう甘くないことは百も承知の上だ。何せ「オールドメディア」に分類される新聞を定期購読しない家庭は、生徒のみならず教員にも広がっているのだから。

新聞の担っている「社会の公器」としての役割を説きながら、地道にN I Eに取り組む続けることを誓って、ペンを置くこととしたい。